

**〈序〉**

サムエルへの主の呼びかけは、子どもたちに対して神からの語りかけに耳を傾ける「心の姿勢」を教える上でも有益な個所である。また、神の語りかけは、厳かなものであって、それは聞く者の心を突き刺すこともあることを教えている。

**〈稀であった特別啓示〉**

祭司エリの息子たちは、主に逆らって主を怒らせた。その怒りは息子たちがほしいままに生きることを放任した父親であり祭司であるエリにも及んだ。そして、主なる神は一人の神の人をエリのもとに送り、エリとその息子たちの罪を糾弾し、裁きが下されることを宣告した(2:27-36)。

したがって、神からの言葉が全くなかったわけではなかったが、特別啓示として当時、「主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった」(3:1)。

**〈エリの子たちとサムエル〉**

上記のとおりエリの子たち、ホフニとピネハスは、父エリという言葉に耳を傾けようとせず、「主は彼らの命を絶とうとしておられた。」それとは対照的に、「少年サムエルはすくすくと育ち、主にも人々にも喜ばれるものとなった」(2:25-26)。この少年サムエルに当時稀であった主の言葉が臨んだのである。

**〈サムエルに対するエリの手ほどき〉**

3章1~9節までは、少年サムエルに対する老祭司エリの信仰の手ほどきが記されている。

神の箱が安置された主の神殿で寝ていた少年サムエルに主の呼びかけがあった。サムエルは、エリが自分呼んでいるものと思い、エリのもとを訪ねた。しかし、エリはサムエルを呼んでいない事実を告げ、彼を寢床へ帰した。

再び同じことがサムエルとエリとの間でくりかえされ、エリは、それが神からの特別の語りかけであると悟り、サムエルに指示を与えた。「戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いな

さい」と(3:9)。

最初に主からの呼びかけを耳にしたサムエルは、「ここにおります」と答えた。これは預言者イザヤが主の召命を受けた時に答えた表現と似ている(イザヤ6:8)。主の御前に立つ心の姿勢として、「主よ、わたしはここにおります」という応答は大切な事柄である。エリもまた主の呼びかけに答える際の心の姿勢をサムエルに教えた。「……もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。しもべは聞いております』と言いなさい」(3:9)。これは、まさに主の御言葉を聞く時の信仰者の姿勢である。日曜学校であれ、大人と共にささげる礼拝であれ、主の御言葉が語られる時、この言葉を心の姿勢とすることを教えることは大事である。

**〈主から託宣が与えられる少年サムエル〉**

3章10~18節は、主からの託宣を受け取ったサムエルがエリにありのままを伝える辛い場面である。サムエルはエリから手ほどきを受けた通りに主からの御言葉を受け取った。しかし、その御告げは少年サムエルには耐え難い主からの託宣であった。エリとその家族に対する主からの厳しい裁きの託宣だったからである。

主からの託宣の一部始終を語ることを命じられたサムエルは、エリにすべてを伝えた。エリもまた厳しい託宣を主からのものとして厳粛に受け止めた。サムエルは主からの御告げを受けた通りに語ることの大事さをこの時、主とエリから学ばされた。

こうして主からの託宣が委ねられる人物としての訓練が与えられ、サムエルは主と共に居てくださり成長が与えられた。そして、すべての人々は「サムエルが主の預言者として信頼するに足る人であることを認めた」(3:19-21)。

主の御言葉に耳を傾け、主の預言者として成長して行くサムエルと、自分の息子たちの悪行を正しえなかった老祭司エリに対する厳しい宣告とが好対照に描かれている個所である。(芦田高之)

テキスト サムエル記上 3章  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問76

### 〔単元のねらい〕

神さまは、罪によって広がる世の闇の中にあっても、人に御心を示されることを望まれ、サムエルを呼びだしてくださった。しかも幼いサムエルが神さまの言葉を聞く姿勢をとるまで、忍耐して呼び続けてくださった。この神のご意志と忍耐と愛によってサムエルは神の言葉を聞く者となった。神さまは、私たちにも同様に呼びかけてくださっている。しかもイエスさまを闇の世にお送りくださるほど、神の救いのご意志ははっきりとわたしたちに向けられている。今、子どもたちとともに、サムエルの姿勢にならって、神の言葉を待ちつつ祈りましょう。

## 「主よ、お話してください。僕は聞いております」

今日も、大好きなみんなといっしょに聖書の言葉を聞くことができ、本当に嬉しく思います。

今日読んだところで、1節に、「そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった」とありますね。この時代、神さまは、「祭司」や「預言者」という人を立てられ、それらの特別な人を通して、言葉や幻によって、人にお考えやご意志を表しておられました。そして人々が神さまの言葉に従って歩むことを望んでおられました。しかし、サムエルさんが小さいころは、そのような交わりがほとんど無くなりかけていたと言われています。どうしてでしょうか。神さまが、人には語りたくない、知らないとおそばを向かれたのでしょうか。そうではありません。人のほうが神さまのことを知ろうとしなかったからです。前の章の12節には、祭司エリさんの息子たちが「ならず者で、主を知ろうとしなかった」と書かれています。つまり、形式的には神さまを礼拝をしていましたが、心からするのではなく、むしろ心は自分のこと、その日食べることや遊ぶこと、自分の関心事や自分の得になることでいっぱいになって礼拝をしていたのでした。そこには、神さまの言葉を聞きたいとか、神さまのことをもっと知りたいという心はまったくなかったのです。そのような人たちが間に立って、いくら礼拝をささげても、神さまの言葉が人々のところに届

くことはありませんでした。では、神さまは、人のそういう態度にあきれて、このような人々にはわたしの言葉は通じないから語るのはやめようとあきらめてしまわれるのでしょうか。

そうではありませんでした。神さまの言葉をなんとかしても人々に届けるために、小さな小さな子どもを選ばれました。それがサムエルさんです。神さまはサムエルさんにどのようにお語りになったのでしょうか。今日の箇所を一緒に見ていきましょう。

サムエルさんは10歳前後だったのでしょうか。みんなとおなじくらいかな。サムエルさんはエリさんのお手伝いをして、一緒に神殿に住んで、神様にお仕えしていました。

ある晩のことです。エリさんは自分の部屋で寝ていました。そして、サムエルさんは神さまの神殿の中で、そこにある火を消さないように番をしながら、そのそばで寝ていました。すると突然、「サムエル」という声が聞こえました。サムエルさんは飛び起きて、「ここにいます」と答えて、急いでエリさんのところに走って行きました。エリさんに呼ばれたと思ったからです。でも、エリさんはサムエルさんと呼んでいませんでした。ですから、「戻っておやすみなさい」とサムエルに言いました。サムエルが寝ぼけていると思ったのかも知れません。サムエルさんは、おかしいなど思い

ましたが、エリさんが言うように戻って寝ました。ところが、また声がありました。「サムエル」。今度もサムエルさんはぱっと飛び起きてエリさんのところに行き、「呼ばれたので来ました」と言いました。けれども、やっぱりエリさんは呼んでいません。エリさんは、いったいどうしたことだろうと思いながら、「わが子よ、戻っておやすみ」と言いました。サムエルさんも「おかしいなあ、確かに呼ばれたんだけどなあ」と思いながら、また神殿に戻って寝ました。しかし、また声がありました、「サムエル」。サムエルさんはまた起きてエリさんのところに行きました。そして、とうとうエリさんは気がつきました。「ああ、これは神さまがサムエルさんをお呼んでいるに違いない」。そして、サムエルさんにこう教えました。「もし、また呼びかけられたら、『主よ、お話をください、しもべは聞いております』と言いなさい」。サムエルさんはその言葉をちゃんと覚えて神殿に戻り、また寝ました。さて、サムエルさんが寝ていると、神さまがそこに来て、これまでと同じように呼びかけられました。「サムエル」。サムエルさんはぱっと飛び起きて、エリさんに教えられたとおりに、「どうぞお話しください。しもべは聞いております」と答えました。すると、神さまはご自分のお考えやご計画をサムエルさんに教えられました。

神さまは、何回サムエルさんをお呼んでくださったのでしょうか。神さまはサムエルが気づくまで、四度も呼びかけてくださってたんだね。最初サムエルは、「まだ主を知らなかった」状態でした。ですから、神さまの声を聞いても、それが神さまだとは気づきませんでした。それだけ幼かったんだね。エリさんから、それは神さまがお話してくださっているのだということ、そして、そのときどういう態度で聞いたらいいのかを教えられて、やっと神さまの言葉を受け取ることができました。このように、神さまはサムエルさんが成長するのを待っていてくださり、その気づかない幼い

ときにも、それでも呼び続けてくださっていたのですね。

神さまは、このようにご自身の言葉を人に伝えたいと望んで、人が聞く姿勢をとることができるまで待っていてくださいます。その間もずっと呼び続けてくださるほど、人を求めていてくださるお方なんですね。なぜならそこにこそ、人が救われる道があるからです。神さまのことなんて知らない、自分のことだけ考えてしまいます。そうして、自分勝手に歩いていく先にあるのは滅びですね。エリさんの息子たちはまさにその滅びの道を歩いていくことになりました。でも神さまの望みは、神の言葉を聞き、それに従って歩み、救われることです。そして、ついにはご自分の独り子イエスさまを地上に送られて神さまの言葉を人々に教え、十字架につけられて御心を示されるほど、はっきりと自分の言葉を聞くように、聞いて救われるようにと望んでくださったのです。これがわたしたちに与えられている、神さまの呼びかけです。

今日もまた、神さまはみなさんに呼びかけておられます。聖書という神さまの言葉を通して、呼びかけてくださっています。そしてイエスさまという私たちと神さまの間に立ってくださる方を通して呼びかけてくださっています。「〇〇くん、〇〇さん。わたしの言葉を聞き、そして救いの道を歩みなさい」と。

私たちもまたサムエルさんと同じように、神さまの言葉を聞きましょう。「主よお話しください。しもべは聞いております」。この祈りの姿勢こそが、神さまの言葉を聞く姿勢です。自分の心にある、あらゆる自分のことを神さまに委ねて、自分の言葉を沈黙させ、ただ神さまお話しください、そう願って祈りましょう。神さまはみんながそう祈ることができるまで、今日も待っていてくださっています。(草野 誠)

---

[今週の暗唱聖句] サムエル記上 3章10節 (後半)

サムエルは答えた。「どうぞお話しください。僕は聞いております」。

---

## 〈展開例〉

今日は、神さまからのお声を聞いた少年サムエルのお話をしたいと思います。その前に、みなさんに質問があります。みなさんは、自分が赤ちゃんだった時のことを覚えていますか？ 生まれたばかりの赤ちゃんだったころはどんなだったかな。お父さんやお母さんと、何でも上手にお話が出来ましたか。いいえ、そんなことはありませんね。赤ちゃんのうち、まだ上手に話すことは出来ません。お母さんが話しかけても、お返事も出来ませんね。でも、お父さんやお母さんは自分の赤ちゃんが可愛くてしかたがないですから、顔を見れば「〇〇ちゃん」と名前を読んだり、泣いていれば「どうしたの？ お腹がすいたの？ どこか痛いのかな？」と聞いてみたり、ご機嫌で笑っていれば「嬉しいね、気持ちいいね」と一緒に喜んだり、毎日何度も話しかけてくれたと思います。それは、みんなのことが大好きだからです。そんな赤ちゃんが少しずつ大きくなって、お話が出来るようになって、「〇〇ちゃん」と読んだときに「はい」なんて初めてお返事をしてくれた時には、とても嬉しくて大喜びしたことでしょう。そんなお父さんやお母さんの愛のように、またはそれよりももっと深くて大きな愛で、神さまはみなさんのことを愛してくださっているのです。

では、サムエルのお話をしましょう。サムエルはその時まだ10歳くらいの子どもでした。でも、エリさんという神さまのご用をする方のお手伝いをしながら、神殿（教会の様な所）に住み、神さまにお仕えて暮らしていました。

ある夜のことで。どこからか「サムエル」と呼ぶ声が出て目を覚ましました。そこでエリさんの寝ているところへ行き、「私を呼びましたか？」

と聞きました。でもエリさんは呼んでいないと言います。「戻っておやすみ」と言われたので戻って寝たのですが、またしばらくすると「サムエル」と呼ぶ声があります。起きてもう一度エリさんのところへ行き、「呼びましたか？」と聞きました。でも、やはり呼んでいないと言います。また同じことが続き、エリさんはとうとう、これは神さまからの呼びかけに違いない、と気付きました。そこでサムエルに、「もしまた呼ぶ声があったら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい」と言いました。サムエルが戻っていると、また「サムエル」と呼ぶ声がありました。そこで、サムエルは起きて、エリさんに教えられたとおりに答えました。すると神さまは、大切なお話をサムエルさんに伝えたのでした。

神さまは、この様に何度もサムエルに呼び掛けてくださいました。それは、サムエルが神さまの呼びかけに気付くまで、何度も繰り返されたのです。

さて、神さまはサムエルにだけ、このようにお話されたと思いますか？ いいえ、同じことを私たちにもしてくださっているのです。私たちが気付いていない時も、お返事できない時にもずっと、そして何度も呼びかけてくださっているのです。イエスさまや聖書を通して、神さまは私たちにいつも呼びかけ、私たちが気付いて、「神さまお話しください。聞いています」と答えるのを待っているのです。

天のお父様である神さまも、自分の子のように私たちを愛してくださっています。その私たちが、神さまの呼びかけに心を向けてお返事することを、心から喜んでくださるでしょう。

※次ページへ続く



〈やってみよう・遊びのアイデア〉

○6月19日分

手遊びをしよう

教師が手拍子をしながらか、「○○ちゃん(くん)、○○ちゃんはどこでしょう」と子どもの名を一人ずつ呼びます。呼ばれた子は、「ここです、ここです、ここにいます」と両手をあげて、手のひらを動かし、キラキラさせながら応答して歌う。応答を繰り返しながら全員の名を呼ぶ。呼ばれていない子は手拍子で参加する。

どこでしょう

♩=92 作詩 作曲者不詳

○○ちゃん(くん) ○ ○ ちゃんはどこでしょう  
 ここです ここです ここにいます

○6月26日分

うた遊びをしよう

「子どもの王さま」

- ①王さまのかぶる冠を作り用意しておく。
- ②輪をつくる。(椅子を丸く並べて座っても良い)
- ③輪の中央に一つ椅子を置き、王さまの椅子とする。
- ④一人王さまを決めて、椅子に座る。
- ⑤王様の周りで輪になった子が歌う♪

♪きれいな 丸い 輪の中に 子どもの王さま いらっしやる

\*はじめに立って ☆お辞儀して ★それからぐるりと回りましょう

\*部分で王さまは立ち上がり、周りの輪の中から一人選び、歩いて行って前に立ち、

☆お辞儀し、

★両手を取って手をつなぎ、ぐるりと半分回転しながら場所を交代し冠を渡す。

- ⑥王さまに選ばれた人が、次に冠を付けて中央の王さまの椅子に座り、王さまになる。
- ⑦歌を繰り返しながら王様を交代する。

こどものおうさま

外国曲

きれいな まるい わのなかに こどもの  
 おおさま いらっしやる はじめに たって  
 おじぎして それから ぐるりと まわりましょ

## 〈ねらい〉

神さまはこの闇の世にあっても御心を示され、一人ひとりに呼びかけていらっしゃる。主の御言葉を聞く耳と心を求めて祈ることを伝える。

## 〈ワーク〉

今日のお話を思い出して、( ) の中の正しいほうに○をしましょう。6と7には自分の名前を入れてください。神さまの呼びかけにいつでも答えることができるように、一緒に祈りましょう。

- 【Q1】少年サムエルは、(神殿・学校) で、神さまにお仕えしていました。
- 【Q2】サムエルは、寝ているとき、(祭司エリ・神さま) に呼ばれました。
- 【Q3】サムエルはすぐに目をさまして、「ここにいます」と答えて、(サムエルのお父さん・祭司エリ・神さま) のところに行きました。
- 【Q4】祭司エリが、「サムエルをお呼びになったのは(サムエルのお父さん・神さま) ですよ」と、教えてくれました。
- 【Q5】サムエルは、(3回目・4回目) に、「主よ、お話しください。しもべは聞いております」

と答えました。

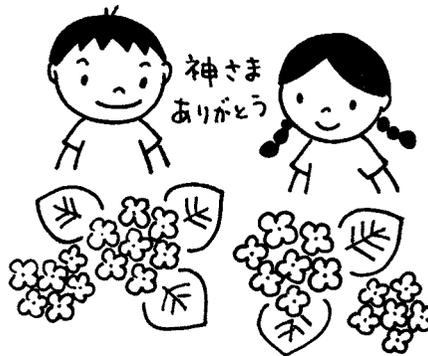
- 【Q6】神さまは、聖書、神さまの御言葉をとおして、( ) にも呼びかけてくださっています。
- 【Q7】神さまは、( ) の言葉を聞き、救いの道を歩みなさいと招いておられます。サムエルさんのように、「主よ、お話しください」とお答えできるように祈りましょう。

## 〈お祈り〉

天のお父さま。毎日、聖書を読んだり、お祈りをして、神さまの御心がかかるようにしてください。神さまの呼びかけにすぐに答えることができるよう、熱心な心をお与えください。

## 〈答え〉

- 【Q1】神殿  
【Q2】神さま  
【Q3】祭司エリ  
【Q4】神さま  
【Q5】4回目



## 〈ねらい〉

神さまはいつも私たちに呼びかけておられます。心を開き、その呼びかけを聞いて受け入れる者になろう。神さまを信じないで滅びる者ではなく、信じて永遠の命を得る者となろう。

## 〈展開例〉

サムエル（神の言葉に聞き従い神の祝福を受ける者）とエリの息子（神の言葉を聞こうともせず神の裁きを受ける者）を対比して、神を信じて従って生きる者の恵みをわかりやすく話す。

○少年サムエルはお父さんお母さんと一緒に暮らすのではなく、神殿で祭司エリの手伝いをして神さまにお仕えするという暮らしをしていました。サムエルは10歳位の子どもだったので、むずかしいお手伝いは出来なかったかもしれませんが、でも、神さまを信じて純真な心で神さまとエリにお仕えしていました。

○そんなサムエルに主は呼びかけ語られました。主の呼びかけに対し、サムエルはしっかりと答え主のお言葉通りに従いました。サムエルは主から祝福を受け、愛されて、立派に成長しました。人々からは預言者（神さまの言葉を人々に語り伝えるという役目）にふさわしい人として信頼されました。

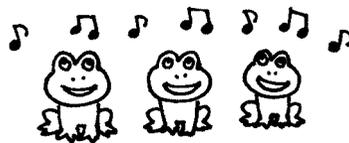
○祭司エリには二人の息子がいました。エリの息子たちもサムエルのようにエリの手伝いをして主に仕えていたでしょうか。エリの息子たちは神さまに仕えるどころか神さまが嫌うこと（悪いこと）ばかりして、自分勝手に生きていました。当然神さまからの恵みを受けることはできません。神さまの怒りを招き、神さまの裁きがくだされ、二人の息子は戦場で共に命を失いました。

○サムエルのように神さまの言葉を受け入れて信じる者は、神さまに愛され、祝福され、救いの恵みを受け、永遠の命をいただくことができます。しかし、エリの息子のように神さまの呼びかけにも、神さまの言葉にも耳を傾けない者は、神さまの恵みを受けられずに滅びの道を歩むこととなります。これは恐ろしいことです。

○私たちは、しっかりと心の目を開き、神さまの言葉を聞き、神さまと共に歩んでいきましょう。そうすれば神さまから永遠の命が与えられます。これはすばらしい神さまの恵みです。私たちは、神さまを礼拝し、祈り、賛美して、神さまを信じる者として生きていきましょう。

## 〈祈り〉

神さま、いつも神さまの御声を聞いて、従うことのできる者となれるようにしてください。



**〈ねらい〉**

御言葉による神の語りかけを知り、御言葉に聴き従う姿勢へと導かれる。

**〈子どもカテキズム〉**

問76 お祈りとは何ですか。

答 神さまにお話しすることです。

そのためには、まず神さまからの御言葉に聴くことが必要です。

信じることは祈ることです。

**〈展開例〉**

○サムエル記に取り組む最初として、サムエル記の文脈を確認しつつ、サムエルの物語の背景を知ろう。

→士師の時代が終わり、新しい時代が始まる。

→サムエルは母ハンナによって神さまにささげられ、幼い時から祭司エリに仕えていた。

○神さまはサムエルに対してどのように語りかけられたかを確認し、その理由を考えてみよう。

→サムエルが神さまからの呼びかけとわかるまで繰り返し呼びかけられた。

神さまは、ご自身の言葉を人に伝えたいと望んで、人が聞く姿勢をとることができるまで待つてくださいる。

○サムエルを呼ばれたのが主なる神さまであることを悟ったエリがサムエルに与えた助言は何だったか。またそれにはどのような意味があるか考えてみよう。

→「もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい」僕が主人の言葉に聞き従うように、神さまの言葉を僕として聞く姿勢をとるためのもの。

○エリの助言によって、主なる神さまの呼びかけと知ったサムエルに神さまは何を教えられたか考えてみよう。またそのことの意味を考えてみよう。

→エリの息子たちが神さまを汚す行為をしていると知っていながら、エリがそれをとがめなかったという罪のためにエリの家が裁かれること。神さまは新たにサムエルをご自身の御心を示す器として召し出されたのである。

○3章19節以下の記述から、その後のサムエルが神さまとどのような関係を持ち、どのように成長していったかを確認しよう。

→神さまはサムエルと共におられ、ご自身を示されるためにサムエルを通して御言葉を語られた。サムエルは主の預言者としてイスラエルのすべての人々に認められるようになった。

